

教育の質とは、カリキュラムの質、先生の質、マネジメントの質

—東京都足立区立中学校副校長会で考える—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：教育の質とは何ですか。

A：(林明夫。以下略)教育の質とは、カリキュラムの質、先生の質、マネジメントの質の3つだと考えます。

Q：日本の学校教育のカリキュラムの特長は何ですか。

A：(1)小学校1年生から高校3年生まで、よく生きるという教育の目的達成のために極めてよく考えられたカリキュラム内容であるのが特長の1つです。

(2)中学校について言えば、国語、数学、理科、社会、英語も極めて充実していますが、音楽、美術、保健・体育、技術・家庭のカリキュラムも素晴らしいと考えます。

(3)多くの国々、特に開発途上国では、教育予算が十分に取れないためか、必要性を感じていないためか、音楽や美術、保健・体育、技術・家庭を独立の教科として十分なカリキュラムや教育設備を備えて教えていないようです。教科の専門の先生の養成も十分でない国が多いようです。

Q：日本の学校のカリキュラムの上での課題は何ですか。

A：(1)語学教育が極めて偏っていて、公立学校では英語のみであるということです。

(2)世界の共通語である英語の重要性は言うまでもありませんが、小学校3年生から英語教育をスタートさせるのであれば、中学校と高校では英語と同時にそれ以外の外国語も学ぶ機会を与えるべきと考えます。

(3)中国語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語などの国連など国際機関の共通語とされる言語の他に、ハングル語、タガログ語、インドネシア語などの近隣諸国の言語も学ぶ機会を日本の中学生と高校生に与えるべきと考えます。

(4)英語以外の言語の先生はどうするか。1人の先生がいくつかの学校を兼任することと、ボランティアの先生の活用で十分に対応可能です。

(5)グローバル化は待ったなしです。大学や大学院で英語以外の言語を学習した人には、英語以外の言語としての教育免許を取得させる「工夫」を「大人の知恵」で早急にする時期に日本はきています。

(6)英語以外の語学の教科書や参考書、問題集は英語と比べ未整備の言語も多く、これで日本のグローバル化は大丈夫かと心配になるほどです。例えば、スペイン語の初級の教科書はかなり出版されています。ただ、誰もが初級に続いて学ばねばスペイン語は決して身に着かない「接続法」の本格的な教科書は、かなり以前に出版されたエンリケ・R・アユカ先生の「基礎スペイン語 2」の他は1～2冊しか現在のところ見当たりません。

Q：日本の学校教育のカリキュラムで、高く評価されるべきものはありますか。

A：(1)教科以外の教育活動の多くは、「かくれたカリキュラム」として世界に誇れるべきものと考えます。

(2)入学式や卒業式は世界中のどこの学校でも行っていますが、学期ごとの始業式や終業式、毎週の全校集会、毎朝・夕のホーム・ルームなどの様々なミーティングは日本が際立っています。

(3)トイレ掃除当番などの当番制度や、学級委員、生徒会活動などの活動も極めてユニークです。

(4)体育祭、文化祭、芸術鑑賞、自然体験、宿泊訓練、修学旅行などの学校行事は世界に類を見ません。

(5)これら「かくれたカリキュラム」の極めつけは、多くの小中高生が参加して行う放課後や休日を利用した無料の部活動です。この部活動のおかげで、どれだけ精神や身体が鍛えられ、友達ができ、チーム・ワークや社会性、躰や規範意識が身に着くか計り知れません。

(6)まだまだ不十分とはいえ、不登校やいじめに親切丁寧に真摯に向き合うことについては、日本の学校は多くの国から極めて高い評価を得ています。

(7)これらの学校における教育活動をビッグデータとして統計的手法で要因分析すれば、日本の教科以外の教育活動の素晴らしさが科学的に証明されると私は考えます。日本には世界に誇るべき「かくれたカリキュラム」があります。

Q：先生の質はどうですか。

A：(1)日本の学校の先生は、教科以外にも、「かくれたカリキュラム」と高く評価される学校での教育活動に真正面から取り組んでいます。素晴らしく、尊敬に値します。

(2)世界の多くの国々では、専門教科を教える高校や中学校の先生だけでなく、小学校のクラス担任の先生も大学院卒が増え始めました。

(3)日本では高校の先生でも大学院卒は1割程度ですので、「学歴」という点からいうと、日本の学校の先生はこれから5～10年の間に相当な努力をする必要があります。

(4)私は、新規採用は大学院卒を中心とすること、現在の先生方は10年以内に修士課程を修了するか、少なくとも大学院の科目等履修生となり、大学院での勉強をスタートすることを提言したいと思います。

(5)教育は日本や地域の未来を決します。教員養成課程に入学を希望する大学生や大学院生には、各都道府県教育委員会が行っている公立学校の教員採用試験と同レベルの入学試験を実施した上で入学を認め、学費を無料にすることを提言させていただきます。

Q：マネジメントの質はどうか。

- A：(1)一太郎もいいですが、ワードやエクセルなどのパソコンのスキル向上に先生と事務職員が本気で取り組めば、学校事務の生産性は格段に向上し、労働時間は大幅に削減できます。
- (2)パソコンの前に座って対処している時間が毎日極めて長いのに、処理スピードが遅いため労働時間が短縮されないのは、「マネジメント」上、大問題です。全教職員が「パソコン初級」「ワード初級」「エクセル初級」「アクセス」などの基礎的なスキルを1～3年かけて確実に身に着けるしくみを学校でも早急に作り上げるべきです。
- (3)学校長の下に副校長が1人と部下が1人しかいない組織は、「組織」とはなりにくいと考えられます。7人1チームなどの組織編成の大原則を、米国の海兵隊や民間企業からもっと学ぶべきです。
- (4)以上のような内容を含めて、2015年8月28日(金)に「学校教育経営品質の向上を目指して」と題して、教育の内容として考えられる「カリキュラムの質」「先生の質」「マネジメントの質」とは何かを、2時間半にわたり東京都足立区立中学校副校長会で講演し、参加者の皆様とディスカッションをいたしました。会場は足立区梅田地区学習センター、エルソフィアの学習室、参加者は足立区立中学校の副校長先生の皆様でした。

Q：学習塾・予備校・私立学校の幹部の先生方にお伝えしたいことはありますか。

- A：(1)少し突飛な提案かもしれませんが、中国の古典である「四書」をお読みになったことがない先生がいらっしゃいましたら、明治書院の「新釈漢文体系」や、岩波書店の「岩波文庫」のワイド版などで、「論語」と「孟子」、「大学」と「中庸」の4つの古典を「現代語訳」の部分だけでもゆっくりとお読みになること御提案申し上げます。
- (2)NHKの大河ドラマ「花燃ゆ」を見ながら、吉田松陰はじめ明治維新を通して現代日本の基礎をつくった人々が幼少の頃から読み親しみ、多大な影響を受けた「論語」と「孟子」、「大学」と「中庸」の「四書」には何が書いてあるのかをじっくりとお読みください。
- (3)孔子の教えを弟子たちが499の章にまとめた「論語」には、「仁」と「徳」を身に着けた「君子」とは何か、孔子の教えを深めた「孟子」には、志をもつ「君子」の具体的な姿が生き生きと語られています。
- (4)先生方の学習塾・予備校・私立学校でエリート教育、リーダー教育を目指すのであれば、「四書」の理解は欠かせないと考えます。ただし、「四書」の中の「論語」だけを読んで「孟子」を読まないのでは、真の改革、革命はかないません。ただ、「孟子」がすべてだと考えると、あまりにも過激ですので、「大学」と「中庸」の理解も不可欠です。
- (5)維新を担った人々は、「四書」だけでなく、「五経」にも幼少の頃から「白文」で親しんでいたようです。日本や世界だけでなく、地元や地域の将来を担うすべてのリーダーたちを教育することに遠慮は一切不要です。公立の小・中・高校でエリート教育、リーダー育成の古典中の古典である「四書」の教育を十分に行わないのなら、学習塾・予備校・私立学校でこそ行すべきです。現代のエリート教育、リーダー育成として中国の古典「四書」の教育をしっかりと

行うことを提案させていただきます。

(6)「四書」を生徒に教える前に、まずは先生方が御自分の勉強としてお読みくださいますようお願いいたします。

Q：最後に一言どうぞ。

A：(1)今月のお勧めの1冊目は、吉田松陰著「講孟余話」岩波文庫、岩波書店 1936年12月15日刊です。これは、吉田松陰が野山獄の獄中で囚人たちに孟子の教えを講義するために書き記したものです。明治書院の「新釈漢文体系」や岩波書店の「岩波文庫」などで「孟子」をゆっくりと通読してからお読みになると、松陰の高い志と熱情が伝わってきます。

(2)2冊目は、NHK チーフ・アナウンサーであった加藤昌男著「ザ・黒板―黒板の基礎知識から活用のワザ、電子黒板まで―」学事出版 2015年8月20日刊です。「チョーク一本で教育改革を」と授業の大切さを訴え続ける私にとって、黒板はなくてはならないもの。

(3)3冊目は、福島県の東日本学院、元代表 渡辺剛氏、ペンネーム星野剛著「熱なき光―昭和天皇への親書―」幻冬社 2015年8月刊です。「日本の禍機」(講談社学術文庫)の著者、朝河貫一の一生をこれ以上望めないと思われるほど丹念な取材と調査・研究の上、著した第一級の著作。是非御一読ください。